

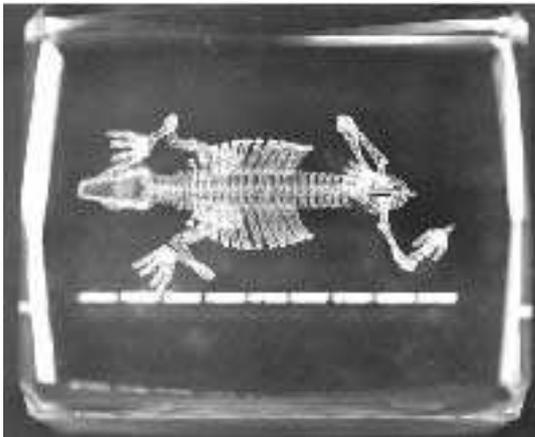
足寄動物化石博物館 10周年

記念行事の第1弾＝アショロアのクリスタルブロック

足寄動物化石博物館は、1998年の開館以来、10周年を迎えます。この10年、少しずつですが、足寄動物群の研究を進め、展示を改善・拡充し、化石工房フォストリーあしよろでの体験プログラムを充実してきました。10周年企画の第1弾として、あたらしい記念品を提供いたします。

クリスタルガラスのなかに浮かび上がるアショロアの骨格と生体復元。文鎮とキーホルダーがあります。文鎮には「足寄動物化石博物館」の文字が入り、アショロアを四方から見ることができます。キーホルダーにはLEDが組み込まれ、七色に輝きます。1個、1,000円です。

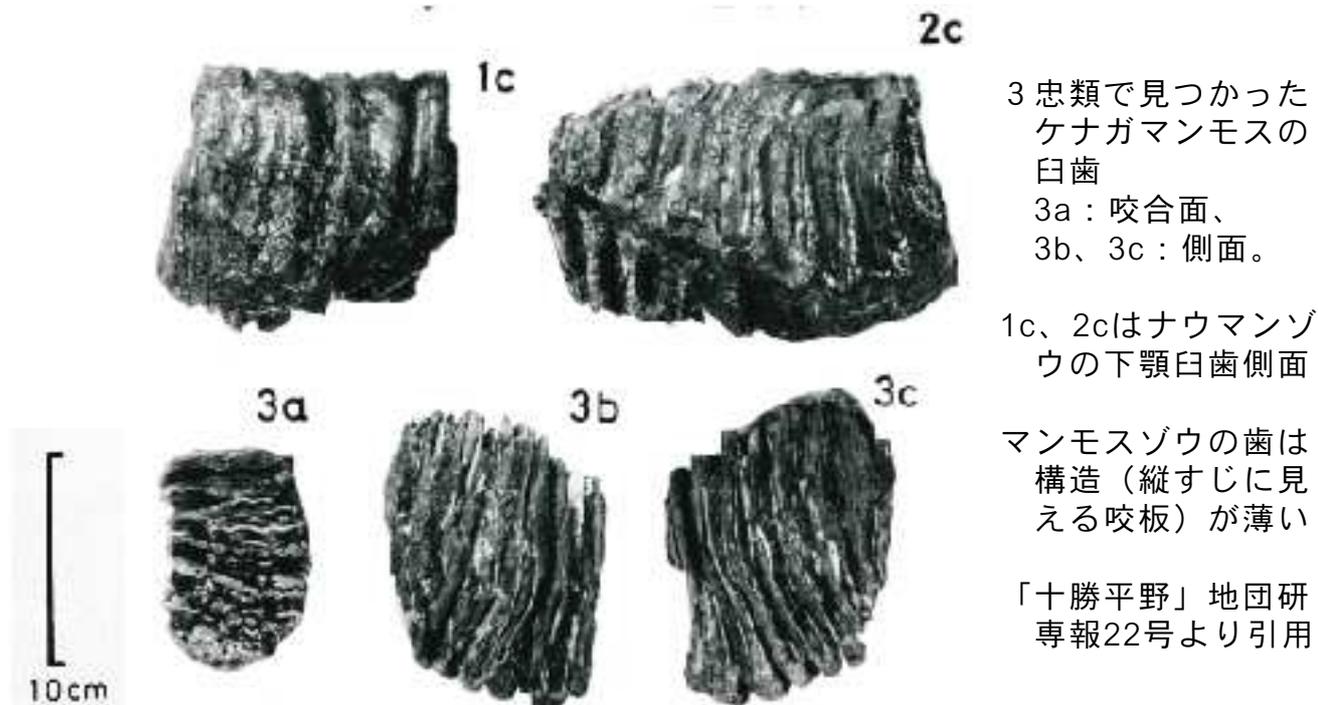
10周年行事には、夏の講演会、あたらしいクジラ骨格の組立・公開、体験クリーニングの充実など、大規模なものではありませんが、足寄博物館らしい着実な内容を計画しています。ご期待下さい。



クリスタルブロックの文鎮（上）と
キーホルダー（下）

十勝にもマンモスがいた

1970年の忠類発掘調査時の資料に混じって



3 忠類で見つかった
ケナガマンモスの
臼歯
3a：咬合面、
3b、3c：側面。

1c、2cはナウマンゾウ
の下顎臼歯側面

マンモスゾウの歯は
構造（縦すじに見
える咬板）が薄い

「十勝平野」地団研
専報22号より引用

十勝で見つかった化石として日本でもっとも有名な「ナウマンゾウ忠類標本」。1970年の発掘以来、20体以上の復元骨格が組み立てられ、全国の博物館などに展示されています。

忠類ナウマンゾウの発掘の際、上下左右の顎に収まる臼歯のほか、不完全な臼歯が廃土置き場からみつかっていました。発掘調査にあたった人たちは、顎の奥に埋まっていた未萌出の「親知らず」だと考え、第3大臼歯だと発表しました。

滋賀県立琵琶湖博物館の高橋啓一さんは、10年ほど前から北海道のマンモスゾウを調べています。氷河時代の代表的な動物であるケナガマンモスは、日本では北海道だけで見つかっています。根室海峡で海底から見つかるマンモスの調査やほかの地域のゾウの化石の見直しを続けてきました。そして、とうとう忠類の化石の中にマンモスを見つけたのです。

ナウマンゾウは氷河時代の中の暖かい時期（間氷期）の動物。一方、ケナガマンモスはシベリアにも生息した寒い環境に生きた動物。北海道は、南北のゾウが行き来した場所として、あらためて注目を集めそうです。忠類にいたマンモスゾウはいつごろ生息していたのでしょうか。もしかすると、2万数千年前ころ、北海道へ最初に渡来した人類と出会い、「闘争」を繰り広げていたのかも知れません。

当館には、北海道産ではありませんが、ナウマンゾウやマンモスゾウの臼歯などの標本があります。ぜひご覧下さい。実物の臼歯にさわれます！ レプリカをつくれます！

休館日 || 2月 5日 12日 19日 26日の火曜日

博物館の動き 2月（館の行事や職員の動き、来館団体、など）

2月25日（月）～29日（金）：クジラの解剖集会

福井県立恐竜博物館や中央水産研究所の研究者が来館し、ミンククジラ、スナメリ、マダライルカなどの解剖をします。